はかりは、ひどい瞋りを起してれッ駈るではありませんか、子供をまだお持でない方は知らぬこと、持たれたれ方なら必らず御存じでありませう、子供をれもふむろの強ことは、叶はぬ敵をも追ッ散らすことが出來る、何と大層なものではありませんか、これが提婆品の慈念衆生猶如赤子とあるこゝろじや、此こゝろから出る言葉じやもの、やさしくなくて何樣するものか、夫から考へて御覽なさい、子供がそんなに可愛ければ、一ッ茲で高い見識になると、我れは受戒入位も濟んだ身じや、佛けの仲間入りが出來た身じや、又菩提心を發して衆生の導師となッた慈父となッた世界の衆生を我か子の如く思ふたら、誰に向ッて憎らしい言葉が出ませうか、高貴多福の人であッても我子を思へば可愛いから、羨やむこゝろもれこらない、下賤薄福の人であッても我子と思ふたら可愛いから、憐れむこゝろが起るのじや、夫は慈愛がかゝるからやさしいことになるに相違ない、夫れから次の御文には、德あるは讃むべし德なきは憐むへし、怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなりと仰せらるゝ、此德あるは讃むべし德なきは憐むへしとお示し相成るのは

若し他人に於て毛はぢばかりでも善いことがあッたら、それを讃歎してまず〳〵善いことをすゝめ、終には導びいて佛道へ入るゝやうに、又德もなく讃めることも出來ない人には善事をすゝめて一ッにても行はしむるやうにすれば、これもいつかは善根の芽がふくじや、デ怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなりとは、怨敵は已れを怨み敵と思ふて居る人のことじや、若しおのれ世界の導師なり世界の慈父なりと位地を高めて見たら、何も他を憎む筈もなく惡くいふ氣遣ひもない、憎惡のこゝろが起らぬから、怨敵などゝは夢でも思はぬ、依ッて相替らす眞實を盡して居ると、オヤ那の人は憎む人でなかッたわいと、いつか向ふから折れて來る、君子は儒者のいふ君子と違ッて茲には君臣父子と分ッたものと見てよろしい、君が臣をだまして僞言を面白がれば、臣また僞はりを以て仕へ、イザと言ふ場合には逃げて仕舞ふか敵に降參して仕舞ふ、父子の間にも若しやそんなことがあれば、一家が決して治らない、君臣の間にあれば一國が治まらない、兄弟の間でも夫婦の間でも又は朋友の間でも、これに準じて知るがよろしい、これ皆な慈念といふ

て眞實可愛いところは湧起る、言葉の言ひ廻し只一ッじや、故に愛語を根本とするなりとのれ示しじや、デ面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす面はずして愛語を聞くは肝に銘し魂に銘す愛語能く回天の力あることを學すべきなりと仰せらるゝは、人若し面あたり向ひあふて、あなたは何時みてもれ若いこと、さッぱりれ年を召さぬじやないか、モーれいくつになりですかと七十にもなる老人に向ッて六十とでも言ッて、御覽なされ、ナニ此奴虚言を吐し居るわいと思ッても、敢て怒りもしない、況んや眞實をもつて言ふのじやから喜こぶことになるは、理の當然なわけじや、人若し面はずして愛語を聞たらどんなに嬉しいか堪るまい、那の人は大層仁德のある人じやと、影でかやうに言はれたらドーだらふ、これを聞た時のうれしさは、肝に銘じ魂に銘して眞實に喜ぶだらふ、又愛語能く回天の力あるなりと仰せらるゝは、本然本性の元へかへすといふ力らのあるので、眞實衆生を可愛がッて發する言語の布施じやから、これをもッて懺悔滅罪せしめ受戒入位の出來るやうに迷ひを晴らして悟りに入るゝ力のあるのじや、じやからかやうに學べよとれ示しに

相成る次第じや、愛語の布施は大層なものではありませんか、如何にもかやうにやりたいものじや、

譬へは小兒の裸体人形のやうなものじや、いつ見ても莞爾して居るし、いつ見ても寒くもなく暑くもない、誰れもあの雛を見て何ほ寒いとさでありッても、火燵へ入れたいとれもふ念も起るまいし、又暑いから水に入れたいといふ念も出すまい、只いつも〳〵相替らす笑ッて居ッて、甜てもやりたいとれもふほどに可愛らしいでせう、して人を喜こばせて少しも瞋からせるやうなことはない、左甚五郎の作ッた京人形は、甚五郎のために刎ねて踊つて廻はり、狩野の描いた虎は狩野の爲めに、飛廻廻したと言ひ傳ふ、何だか怪しい噺しのやうじやが、眞實一心をこれに籠めてすることであるのだから、或ひはまたないともいへぬ、況んや愛語は回天の力をもつて居りますから、無量な働きをいたすに違ひない、決して疑がふてはならぬことじや、」先年アームストンといふ曲馬師があッて、わざ〳〵西洋くんだりから、此日本へ遣ッて來て、両國に劇場を設けて衆人に見せたことがある、あせり不思議なことをす

るといふから、一日拙僧も往ッて見た、往ッて見ると驚いた、馬が言ふことを守り獅子が自由になり、又象も虎も皆自由になる、それは〳〵鸚鵡が人の口真似をする位な噺しじやない、見られたれ方は御存じでもありませうか、獅子と人間と角力を取り、又虎と人間と角力を取り、又其虎を自由自在に使ひ其獅子を自由につかふ、マア何と考へられる、獅子ゝ子供のうちでさへ一聲哮れば、もろ〳〵の獣類はこと〳〵く逃げて仕舞ふといひ又虎も強い獣で二と言ッたら三に下らぬ位ゐじや、それが那のやうに自由自在に使れて寝ろといへは寝もするし起ろといへは起きもする、踊れといへは手を動かし廻はれといへは廻ッて來る、虎や獅子ばかり其樣するばかりじやない、馬もまた驚いたものじや、十二三頭の馬が皆アームストンの言ふ通りじや、象もまた其通り、何れも〳〵も音樂の響きにつれて、調子に乘ッて踊り出す如何にしてかはせまでに仕込みしものか、我國でも猿廻しといふものがあり、近頃では犬の芝居もやるが、これ皆愛語を本とするので、やさしく言ふて馴れさすのじや、物數奇な人があッて、犬を仕立るところを見たが二ッ三ッの藝を覺えさせるに

も大層な骨の折れたものじや、片手にはパンを持ち片手には煙管をもちて、良宇竹に手をかけさせ、ろうしてチン〳〵を教ゐるのじや、猿を仕立てるのもあまり容易いことでもあるまい、然るを象は象のやうに自由自在なはたらきを爲し、獅子は獅子のやうにはたらきを爲し、虎は虎のやう馬は馬のやう、かやうに活動かせるに至ッたには定めて暇が入ッたであらふ、只暇が入ッたばかりでなく大層骨か折れたであらふ、其時拙僧がれもふたには、殺ひ畜類といふと言へども手真似足真似して口に愛語をはゞこし、真實教える氣になッたら、覺えないこともあるまい、何にも例しだ一ッやつて見やうと、犬を一疋貰つて來ていろ〳〵にやつて見たが、ドーして〳〵、一日や二日で往くことではない、二十日ばかりやッて見たがドーしても甘く往かぬ、デ如是畜生發菩提心といふて斷念めて仕舞ッた、併し此等の獣に對して愛憐の心ろを出して、斑や能く來たなア早く來い〳〵御馳走があるからなゞ、やさしい言葉をかけて御覽なされ、うれしがつて尾を搖て喜こんで空をかけて來れゞも不思議なもので犬殺しを見ると、殆んゞ盜賊らしいものでも見付たやうに、わん

〳〵吠えながら逃げて往つて、主人に知らせに行くのじやが、わのやうなところを見ると、彼れに殺すといふ悪意があるからのことじや、じやから愛語は回天の力ありといふて此樣な衆生でも菩提心を發すの因に相成る、なんと有難いとではないか

第貳拾四席

（修證義第四章發願利生第貳拾壱節）

利行といふは貴賤の衆生に於さて利益の善巧を廻らすなり窮龜を見病雀を見しとき彼か報謝を求めず唯單へに利用に催はさるなり愚人謂はくは利佗を先とせは自らか利省れぬへしと爾には非さるなり利行は一法なり普ねく自佗を利するなりサテ此御贊題は四攝法の三番目、修證義第二十三節に置かせられて、利行の次第をお示し下さるのじや。御文に利行といふは貴賤の衆生に於さて利益の善巧を廻らすなりと、かやうにお示しに相成るのは、凡そ六道の衆生に於て失敬なから上み九五の位を占めさせたまふ、一天万乘の君を始しめ奉つり、下は地獄の生類に至るまで貴となく賤となく一樣一体に思し召すので、おしなべて其衆生に利益を與へるの善巧を廻らすである、善巧とは方便といふことで俗にいふ手段なり、高貴の人には高貴なりに其手段を考へて、頭を低けて往つて何樣いふ塵埃にやるとか、下々のものには素より己れ目上であるから、何樣なことをいふも譯がないが、去ながら手段を考へぬといふと、餅屋へ酒を買ひに往ッたやうなことが始じまる、ダから能く〳〵機根をはからひて其好むところを察し、これに投ずるを方便といふのじや、上みに向ッても其通り、其好ませたまふところを察して、追〳〵と其機根に應ずるやう考へねばならん、やたらやッて宜いものなら何にも善巧方便の價ひがない、上に向ッても下に向ッても、其利益を與へるところを考へねは、良藥返ッて毒藥となり再び服む氣になりません、因より受戒入位も濟み發願利生を企だてたるものに上下の差別あらふ筈がない、只〳〵利益を與ふる爲めに上下の機根を察するのじや、察してこれを行ふから即はち利行と相成る次第じや、ヂ次の御文には窮龜を見病雀を見しとき彼が報謝を求めずして唯單へに利用に催さるなり、かやうに仰せらるゝのは、其利行をいとなむには何のやうな心持であるかといへは、窮龜とて貧るとか貧ふて喧ふとかいふ龜を見たら、錢を出して買ッて呉れるなら錢を遣ッて引取るもよ

し、錢は入るのじやない藥りにして母に喰はせるとか言ふなら、其方劑はいくらもあるから、何とでも手段方法をめぐらして、其窮龜を助けるのじや、窮龜のことは晉の孔愉が故事で窮龜を買取て之を海に放ち、其龜が後ちに恩を報じた噺しで、蒙求の中にある、又病雀を見付けたるときは、矢張りこれを助けにやならぬが、何様すれは助かるかと、いろ〳〵手段を廻らして、水も呑ませ藥りも投じにやならぬ、病雀の事も、矢張り蒙求の中にあるが後漢の楊寶が故事で、雀めどもが鴟梟に追ッ駈けられて、逃げ廻る其時に鴟梟の羽に強く打たれて、肩息になッて地に墜ちて居るを助けて、後に其雀めから恩をうけたのじやか、楊寶も孔愉も、まさか雀や龜から報酬を受け取らふなどゝいふ考へは、毛はどもないのでわッたが、自然と利行に催はされて、直く助ける氣になッたのじや、利行はかやうな心ろ持で行はねば、決して利行にはならぬ、那の人には斯樣なことを敎ゑてやッて、夫れがあんなに大盡になッたのじやが、今れれが、斯樣なに貧乏をして居ても、知らぬ顏をして居ッて、彼方むいて通る憎い奴じや、ナルはどゾヤ向ふも惡るいだらふが、其樣な

恩を受けやうなどゝ思ッては、尙更甚だしく惡るい、夫では雀や龜から笑はれます ぞ、楊寶何の心もなく孔愉何の心もないので、大層な恩をうくることになッたじやかやうにせよとのれ示しなのじや、夫から次の御文には愚人謂はくは利他を先とせば自からが利省かれぬべしと爾にはあらざるなり、利行は一法なり普ねく自他を利するなり、かやうに仰せられて、横道に迷ッて居る奴をれ叱りなさる、若しも利他〳〵と他のものばかり考へて居た日には、自分の利益を得ることがない、夫れでは一向つまらぬじやないか、自分が功德を積んだのは、自分が樂しみをしたいからのことじや、子供を大きく育てあげて何にする考へたといへは、れれが老耄してから世話になる考へから、喰ふや喰はずの中で、蜻蛉がへりをして骨を折ッて、ねんやらやッと大きくするのじや、それをれのれが世話になる厄介を止めて仕舞ふたら、骨折損の草臥儲けじや、斯樣なつまらぬことがあるものかといふやうなものじや、大丈夫だよ一方の子には身を忘れて孝行をしろとの敎ゑじやから、うんな心配はかけない、安心して居るかよいとれッ仰る、即ち御文に爾にはあらざるなり、利行

は一法なり普ねく自他と利するなりと、かやうじや、親の爲め子の爲めにするといふやうな妄念が鵜の毛はぜもあッた時には、利行とはならないが、親も子も双方何のことも思はず、子は孝行して居る了簡でなくても、自から孝行になり、親も慈しむ了簡でなくても自づと慈しむことになるから、それで瞋嗔もなく、丸く治まつてゆくのである、夫れを双方鼻にかけて、おれが貴公を大きくしたのは何の爲めであるとか、之れでも不足といふならば何で斯樣な子を產みつけた、サア斯樣なになると堪らんから利行は一法なり、法界唯一法の利行じやから、一ッの利行をいとなみても、それが多くの衆生の爲めになるので、佛けになる道は一ッの利行でも足りて居るのじや、かやうにれ心得あつて、利行をいとなむことに致したい、譬へば物を配ばるやうなものじや、今日はれ彼岸の中日じやから、佛けさまへれ萩でも拵えて上けやうと、佛け樣見當に拵らへるのじやが、れあまりをと喝へて近所隣へ差上げて、其返報を受ける氣じやなけれども、私しのところではれ餡をこしらえて供へましたから、れあまりを少々と持つて來て呉れる、イヤ私しのところでは精進揚をこしらえて供へた、れあまりを少々ばかりなぜ、貰ふ氣でもなかッたが、何處からも皆慰報が來る、若し一ッ間違ッて、今日は佛けさまは何樣でも宜いが、子供がやかましくて堪らんから斯樣なれ萩をこしらえたが、れ前さんのところでは何をこしらえたオヤ〳〵精進揚、夫れでは取り替へッこ仕樣じやないか、何んだ始めッから余所へ配るものに返報を待ッてれ送る考へだか、ろれも一ッものじや、お萩をやッてお萩を貰ふのじや損德なしだ、夫れもモシ不味でもあッた時には、割りにも理屈にも合やしない、じやからこれを止めにして、精進揚なら質易しやうといふたよふなもので、佛けに供養は扨置きなんの爲めにもなりはしない、じやから思はぬといふところに妙味のあるので、一家は一家で睦ましく近所は近所で睦ましく一村は一村一郡は一郡一國は一國終に天下平かに睦ましく治まるのじや、利行をれのれの爲めとれもふては、迎も算術にかゝッて來ぬ、好し來たところで何の事があるものか、又迎も來る氣遣ひはないのじや、

昔し伊豆の國に若き地頭があッて、春の二三月頃兄弟の若者打連れて野山に狩りに出かけまして、其歸るさに猿を一疋搦め取ッて舘へ歸ッた、シテ其猿を今晩の下物に仕やうといふので、柱へ縛りつけていて、近所の友達を呼びに歩行て居ると、スルと其若殿原の母公は年老いて隠居せられ、今は後生一三昧の折からであッたれば其猿を見たまふより、生れ質茲悲もあるれ方のことへて、又斯樣なものを持ッて來たか、ドレ助けて取らせんとて、一人の侍ひを呼びまして、可愛や此猿を何とするのじや、ハイ若殿さまが今晩のれ酒のれ下物になさると申すれ嘶しです、ナニ下物にとナ、此猿も親もあれば子もあるだらふ、委たコッ畜生なれ、物ころ云はぬ命ちを惜しみ親を慕ひ、又子をれもふは生類の習らひなるぞ、早く其いましめを解きて山へ歸して遣はせとあるに、待ひ若殿方の怒りと恐れ手に觸るへさへなさいる氣色、イヤ若殿樣のれ怒りが恐ろしうムりますからといふ、然らは好し、妾か解いて取らせんとて、縛しめを解き山へ歸された、此猿畜生の心ろにも母君のれ情けをありがたく心得たりと見え、其年の夏の頃にいたると苺を柏の葉につゝみて、母君

の隠居所に持ち來たり、物いふことくに手眞似足眞似して、恐れながら申上ます此春は有がたいお情けを頂きました、斯樣なものを差上ては相濟ぬ次第であれど、れ情け御報謝いたしたく存じ候、人目を忍びて山を踰え谷を渡りて堀を越え塀をつたふて漸やく御隠所へ參りましたといふが如く母君の前に差出したれば、其心ろを推察ありて、深く感れみを催ふさせられ、膝の側へ來りて其苺を見せよと仰すれば、猿は恐る〳〵禮を正して、苺を運ぶ有樣を見そなはして、ドレ〳〵と受け取りて膝に懐きあけ、可愛のものやと涙はら〳〵とこぼされた、漸やくに猿を側に下して布の袋一ッ縫はれて、これに大豆を入れて猿に與へられたれば、猿はよろこびて両手にこれを受け、其袋ろを幾度となく押し戴きて、慇ろに暇ごを告ぐる有樣して、頓て山へ歸りたが、スルと又年の九月の頃、右の袋へ栗を拾ひ聚め入れて、大豆を入れて下された御恩にとて、又も持つて來て返報をいたした、母君はこれを受け取りたまひて、膝に抱えて涙を流し、オヽ嬉しく想ふぞよ、偖か縛解いて遊がしたのをそれほ迄に恩とおもふて、此夏は能い苺を貰ッたに、又も栗を以て大豆の恩をか

すか、畜生なれども、よくさけや、此人間の世の中には、人間の姿はしても、人間でない人もある、汝は畜生に身はうけて居れど、こゝろは立派な人間どや、此後聽物はうけぬから、其心配をかけるが氣の毒、今度は移りは違らぬどや、親あらば親に孝を盡し子があらば子を大事にかけて、此次の世は人間に生れて來い、イヤ歸れじやぞや此れ切り來るな、人の目にかゝつたときは又もひぢい目を見にやならぬ、浮世ないことじや、モウ〳〵來ては決してならぬ、と我が子に別れでもするやうに感涙はら〳〵流されて、猿をれ歸しなされたるが、猿もまた名殘を惜しひとく、見返り〳〵歸りゆくを母君は其影の見ゆるまで見送りて、いよ〳〵見ねなくなッて來ると、我を忘れて取り乱されたを、只ある侍に伺ひ見られて、涙だの顔を漸やくに拭はれた、なんと皆樣、利行はかやうになければならぬ、

（修證義第四章第貳拾四節　利生第貳拾四節）

第貳拾五席

同事といふは不違なり自にも不違なり他にも不違なり菅へは人間の如來は人間に同せるか如し他をして自に同せしめて後に自をして他に同せしむる道理あるべし

自他は時に隨ふて無窮なり海の水を辞せざるは同事なり是故に水聚りて海となるなり

サテ此贊題は修証義第二十四節でありまして、四攝法の四番目同事といふことをれ示しに相成るのじや、前席でお噺しを致したる、利行をいとなみするには、是非とも手段がなくてはならぬ、夫れから其手段を行ふには是非とも同事といふことか入り用になッて來るので、この順が能く立ッて居るかられ噺しにも骨が折れませんテ御贊題の本文に入りますれば、同事といふは不違なり、自にも不違なれば他にも不違なりと仰せられて、定義を定めて不違とちがはぬことじやと仰せらるゝ、ソウであるじや、字で書いてさへ事に同するじやから、デ背かぬちがはぬといふのも、事に同して一ッになッたからじやらふ、デ同事といふのは其物に隨ッて終に其物と同じになるやうなわけじやから、丁度石を燒いて其側に又石を添ねて置くと、燒た方の石の熱は次第に冷たい方の石が吸ひ取ッて暖たかくなりて、冷熱平均するときに全く同じ己るやうなものじや。デ自に不違なり他にも不違なりと仰せらるゝは、

自分にれのれが背かぬやうな次第は如何なる樣子なものかといふに、先づ自身にれのれ〳〵と常に言ッたとの、其れのれといふのを考へて見よ、れのれとは必ろのことか身のことか、好し身のことゝすれば、寒暑冷熱ろの時候〳〵の替はる度毎に身に背いては居らぬか、朝の時候と夕の時候とに常に背き、昨日の時候と今日の時候とに常に背きて、生涯時候と喧嘩の仕通しなり、然らは其度び〳〵に着物を着更ゑて、昨日は何度の寒さじやから何枚の重ね着でよかッたか今日は何枚着ねばならぬ今朝は寒かッたが晝頃になッたと見ゑて暖かいことじや、ドリヤ壹枚脱ふかなぞゝ隨分注意して居りてさへ夫れで中〳〵同じられぬ、モ早やコレは温かいとか寒いとかを感じるときは、既に已に背て居るなり、然らば到底身の着物と同するは出來ることなるべし、然らは心に背いて居らぬかといふに、此心にも常に背きつゝけなるべし、退ぞきて考へ見よ、世間に向ッて人並な顔をはして居れども、れのれのこゝろを探ぐッて見ると、必らず思ひあたることわらん、然らばこれも到底なし能はざるか、實に自分が自分に同するといふことは至極難事のことである、然らは駄目

な事かといふに決して駄目ではない、其次の御文に譬へば人間の如來は人間に同せるがごとし、迎も凡慮で如何に考へたッても企て及ふところでない、これを釋迦如來は我〳〵を濟度の爲めに娑婆往來八千遍といふ數をれ積なされて、漸やく人間に生を受けて來て、人のするやうなことに違はぬ御ありさまで、我〳〵人間にお同じ下された、即はち生を明らめ死を明らめ、れのれが罪業の深かりしことを懺悔して受戒入位をいたさせて、菩薩の行願も起させて下さッたから、これで心に不違なことは出來ない、どうしてもれのれがおのれに同じて仕舞ッた、それから身の方はといへは、其土地に緣があッて其土地生れだのだから暑いは暑いなり寒いは寒いなりに時候も左程苦にもならん、万物か皆世界の有のまゝにある通り、れのれも有のまゝにあるのじやから石ころか河原に碌々して居ると同じことで、天地の眞理とスッかり契ふて、同じて此まゝあるのじやから、勿論れのれに背く道理がない、然ちは自分が自分に同する時は木頭瓦礫のやうなものかといふ、其活動は大變じや、これに依りて三千世界を動かし、一切の衆生これが成佛を得るのじや、シテ他に同す

るとは、如何の次第なものかといふに、只〳〵主客の違ひあるのみじや、他に同ずるは對手が主となりて此方が客となるのじや、即はち對手が熱した石であるから此方から冷たい石が添ふと、トト平均して同じ已る、デ人間の如來は人間に同せるが如しとのれ示しに從へは、天上濟度の其時は天上の如來となり天上に同じ其他四悪趣も亦復然なるべし、其次ぎの御文には他をして自に同せしめて後に自をして他に同せしむるの道理あるべし自他は時に隨ふて無窮なり、かやうにれ示しに相成るのは、正法眼藏のれ言葉に同事をしるときは自他一如なり、と仰せあるて畢竟自他の名に迷てはならぬ、れ示しの趣は是れが圓融の至妙にして、向ふから此方に同じおはら世て後に自からさして他に同せしむる道理あるべしで、那方か此方へ同ずることもあり、此方が那方へ同ずることもあり、それは何樣でもよろしきやうに、ナセかといふに、自他は時に隨ふて無窮なり、何處までいつても窮りがない、此方が主になることもあらふし、那方が主になることもあらふ、法華經に謂ゆる百歲の悋に二十五歲の親なれば、那方が此方、此方があちらと生々世々替はる者のなればである、此圓融の道理をお譬へなされて海水の水を辭せざるは同事なる是故に水聚合て海となるなり、此れは管子の語をれ用ゐあらばされて、「薛不辭水、故能成其大、山不辭土、故能成其高、明主不厭人、故能成其衆」とあるを俗說なれ共ら隨喜引用遊ばされたり、大海は實に溪流川河の集まるところであつて、何でも彼でも水でさへあれば、決して否應は言はざるなり、故に能く大を成すじや、じやから大につけ小に付け萬事萬物は此同事一ッで成立て居ッて實に佛けになちるへ因があるのじや、譬へば此身体のやうなものじや、四大集ッて此の身体をこしらへたが、水は火に同じてばかり居るかとれもひは、地にも風にも同じて居り、風は火にばかり同じて居るかとれもひば、地にも水にも同じて居り、火は風にばかり同じて居るかとれもひば水にも地にも同じて居る、地は水にばかり同じて居るかとれもひば火にも風にも同じて居ッて、此身体一ッに見せて居れど、開散の期か來た時には、夫れで無くなッて仕舞ふかといへは、不增不滅て無くなる氣遣ひはない、又他に同して仕舞ふ、

じやから他にあるもの、身体を始じめ諸ろ〳〵の衆生の身体は、皆此四大が圓融して作りあげたことになる、既に此身体がううであれは、世界の萬事萬物はみな此の同事圓融を出ません、然れども今は菩薩四攝法のれ嘶しであるから、利行の方便て其機根〳〵を見計らひ、即はち病ひの根を探らんが爲めに、如何なるものに同じてか衆生濟度をいたさん、如何なる藥りを投じてか其苦を脱せしめんと、工夫する爲めの土臺を固めて、其土臺さへ出來て仕舞へば即ち同事となりて、三十二の應身を現じて、何樣なところへでも濟度にゆかるゝのじや、是れが菩薩の大願じやけれども、餘の万事万物に就て、同事の道理を極めて見ても、至極面白いことになる、能く〳〵考へて見らるゝがよろしい、

昔し南都の道照法師、入唐せられし時に、道すがら新羅の國の山中に入りしが、大なる虎道に出で、人間の語を以て法師に語りいふやう、此山中には虎か澤山に居りまして、人間やもろ〳〵の衆生に害をわたへますから、私しがこれを濟度いたろうとれはもつていろ〳〵と心配いたしますが、中〳〵容易のことにはまゐりませぬ、

願はくは法師經文を講說いたされて群虎にきかせて下されといひますから、道照法師は其願ひを納れまして、山中に入りました、スルと大なる虎は一聲高く吼ますと數百の虎があつまりまして、害も加へず道照法師を取り卷きます、法師はこれに對して說法をいたされましたが、虎の耳へは何ときこへるやら、其はゞは知れませんけれども、一座の說法だけは終られました、スルと大なる虎また高く吼ますと皆首を低れて聞て居ります、大方愛語を放つに違ひありませんでせうから、何となく猛き心ろを靜めて聞て居るのであります、法師は大なる虎に向ひまして、汝ぢは尋常の虎ともれもへぬ、何れ子細もあることならんが、其謂れうけたまはりたしといへば、大なる虎の曰く、われは日本にて役の行者といへしものにて、日本の化緣つきます時に、母を鐵鉢の中へ入れまして、海をわたりて此國へ來ましたが、母も間もなく死にましたから、今度は佛緣の薄きものに、化益を與へてやらふとれもひまして、虎の王ともいふべき程な、强くして大きい此やうな虎に生をかへました、幸ひ法師の入唐と聞きて、是れへ出てれ願ひいたし、化緣のお助けを仰いだのでで

ざりますといふから、道照法師はいと〳〵感心いたされまして、成はゞ日本には役の行者といふがあッて、大和の葛城山の岩窟に居れたといふ、高麗の惠灌法師が三論宗を弘められた頃にあたれば、何宗の人といふは知られぬと兎に角修驗道の開祖といふことは承知して居る、鬼神を役し空中を飛行し、一言の神の譴責に遇ふて君主の怒りに觸れ、二たび流刑に遇れたが、許されて山に歸り、摂津の葉面山の瀧に入りて、龍樹菩薩にあひたてまつり、密教の奥義を傳持され、其後文武天皇大寶元年六月七日といふに、母を鐵鉢の中へ入れて、笹の葉を浪に浮べ、それに乘りて行方しれずと聞きたるが、扨は其役の行者の後身にありけるよな、尊としやなつかしや菩薩の化縁斯の如きか、道照感心つかまつると、嬉し涙だにくれられましてい、猶日本の物語りのつゞきでに、山伏の安心をたゞねられますと、虎さまをたへて曰く、隨縁の忘想を六根にふれて、無量の罪悪をつくり多劫の生死を經歷して、卧輪其期なきものを引きて、佛法の門内に誘ひ入れ、終に成佛せしむるの方便なり是ひまもれ、此事は續日本紀靈異記、本朝神社考、或ひは元亨釋書などにも見えましたが

何んと皆さま、同事とは斯やうなものでありますす、異類を濟度いたしますには、是非とも異類に入らねばならぬ、じやから物言ふ牛もあり、口をきく狼もあります、皆佛菩薩同事の善巧であるから、只の牛や狼とれもつてはなりません、

第貳拾六席

（修證論第四章發願利生第貳拾五節）

大凡菩提心の行願には是の如くの道理靜かに思惟すへし卒爾にすること勿れ濟度攝受に一切衆生皆化を被ふらん功德を禮拜恭敬すべし

サテ段〳〵とすゝみまして、此の御贊題で發願利生はれ結びとなッて居ります、夫れでかね〳〵も申した通り、茲に更にれ示しになるのは、大凡菩提心の行願はと、前の十八節の御文のことを操り返さるゝので、菩提心を發すといふは已れ未だ度らさる前に一切衆生を度さんと發願も營むなり設ひ在家にもあれ設ひ出家にもあれ或は天上にもあれ或は人間にもあれ苦にありといふとも樂にありといふとも早く自未得度先度他の心を發すべしと、お垂示になりましたお言葉をれ結びあるばさるゝので、即ち自未得度先度他の心を發すのじやと、申し付けては置されども、定めて

如何にあらふか、又其仔細も示して置きたれども、是れはどふ合點いたしたぞ、デ第十九節より前席第二十四節までの次第を、お結び遊ばさるゝとて更に、是の如くの道理と仰せられて、即はち菩提心を發せは已に一切衆生の導師なり、乃至此れ佛道極妙の法則なりとれ示しありばされしこと、第二十節にて、若し菩提心を發して後六趣四生に輪轉すと雖ども其輪轉の因皆菩薩の行願となるなり、此れ示しのところより衆生を先に度して自からは終に佛に成らす但し衆生を度し衆生を利益するもありとれ示しありしこと、第二十一節の衆生を利益すといふは四枚の般若なり、乃至舟を置き橋を渡すも布施の檀度なり治生産業固より布施にあらざること無しまでと、第二十二節の愛語といふは乃至愛語よく回天の力あることを學すべきなりまでと、第二十三節の利行といふはより乃至爾にはあらざるなり、利行は一法なり普ねく自他を利するなりまでと、第二十四節の同事といふはより乃至海の水を辞せざるは同事なり是故に能く水聚まりて海となるなりまでの意味、是の第十八節より第二十四節までの道理は、能く〳〵知れたであらふが、如何も何だか覺束ない、靜かに

思惟すべし卒爾にすることなかれ、靜かに考へて見ないといふと分らないぞ、輕卒にせッせと通りぬけて、何が耳へ聞えたやら、分らぬやらでは所詮がないぞ、心ろを靜めて、深く考へろよ、折角受け難き人身を受けて、値遇し難き佛法にあひながら本の杢阿彌となッてはならぬ、若しよくかね〳〵示した通り、心底に呑み込めて來るといふと、三界一切の衆生を攝受して、濟度することが出來るのじや、みなうの化益にあづかりて、のこる衆生は一人もないぞよ、斯くのごとく心ろがけて、功を積み德を累ねて、行願を滿足し、利生を忘れてはならぬ、禮拜恭敬するがよろしいと、どこまでれ慈悲がかゝることぞ、ドーじや、かやうに御心をつくさせられてお心配をなされて下さる、實以て高祖大師の老婆心どこまでもれもふて下さる、先これて發願利生をスッかりとれ結びなされたのじや、一口に申すといふと、受戒入位の身の上になッたら、發願利生を忘るゝな、是れ佛道極妙の法則じやとれ示しあうばさるゝのじや、

譬へば水の流るゝやうなものじや、佛の眼こから見るといふと、一切衆生が可愛く

て堪らぬ、又不びんで堪らぬのじや、此念は些しばかりも止ひときがない、アメリカでも歐羅巴でも、支那でも日本でもよいが、先づ川といふ川を御覽なさい、實に源泉滾々として流れ、いつまでも〳〵、つくるといふためしはない、晝は流れて夜るは寢やうの、風をひいて寢たといふ噺しも聞かず、胸がわるいから休んだといふこともない、肺病で死んだこともなければ、腦膜炎で死んだこともない、たゞ〳〵晝夜の差別もなくして、滾々と流れてつきない、かやうに休ひときもなく、一切衆生の爲めにつくさせたまふ、諸佛菩薩のれぼしめしは、何と大したものではないか俗に「れもひ出さねばこそ忘れもせず」と茲のことじや。

昔し英吉利の片田舎にメリーと申す少女がありまして、九ッの時に母親に分れました、子供心にも其悲しみは堪ゑられませんでした、追〳〵と年を重ねて早や人のところへも嫁し、子供まで設けました、然るに其子もれひ〳〵と月を重ね年を經て、今は十三歳になりましたが、何とした事か此子供は、人並み外れて惡戯を好むゆへ、母親の心配は大層なことです、おのれ九才の時に母親に別れたれとも、骨て其

教訓を忘れたることなければ、其母親の教ゑのまゝを、平生其子供に語り聞かせました、坊や茲へれ出、れ嘶しをして聞かせるから、寇れてはいけないよ、れ前の祖母さんで妾しの母親にあたるお方は、世にも稀れな人でありましたぞ、其血を引たれ前にも似合ぬことじや、れ前の祖母さんで妾しの母は、妾しが些とばかりでもよいことをすると、飛びたつやうに嬉しがり、又惡いことをするといふと、妾しを部屋へよびよせて、涙を流してなぜ其方は其樣なことを致したぞ、常〳〵母が言ひ聞かせたこと、よもや忘れは致しますまい、自分が善いとれもふて致したか、又惡いとれもふて致したか、若し善いとれもふて致したことなら、善いとれもふて致したと有やうに言ッてれ聞かせ、又惡いとれもふてのことならば、其やうに言ふたがよい、隱してはなりませんぞ、ソレで若しも惡いことなら涙を流して叮嚀に、道理を教ゑて呉れました、其道理がよく分ッて、合點の往ッた顏が出來ますと、母はやう〳〵に涙をれさめました、れ前も今惡いことをして、此母がいふことが合點がいたら、これから此やうなことを致してはならぬよ、妾しがれ前を可愛いやうに、祖

母さまも妾しを可愛くおもつて、妾しを此やうに人並みにして下さつたのだよ、れ前も善い子になつてたもや、忘れもせぬ九ツの時に妾しは母に別れたが、沒しまする前夜に、母のところへゆきたいとれもつたれど、父や醫者り外には誰れも近りませす、只かなしくなつて泣いて居りましたれば、母が妾の聲を聞き付けて、メリーよ茲へ來て呉れ、チトばかり言ひたいことがある、妾しは其聲を聞くとうれしく直ぐに其傍へゆきました、往くや否や接吻しますといふと、母の顏は青さめて最早や息きづかひも餘程せはしいやうであつた、母は苦しい中から身をれこして、妾しの顏をつく〳〵と打ながめ、ア、、メリーよ今此母がいふことを、必らず忘れてたもんなや、今まで可愛き中に日を送ツたが、是から妾しは遠く〳〵と、歸らぬ旅に赴むくのじや、吾がなき後は父さまに、無理なことを言はぬやう、又何なりとも背いてはなりませんぞよ、また父さまもお若いから、又替りの母さまも來ませにやならん、此異の母よりも、一層大事にせにやならぬぞ、れ前が惡るいと此母が笑はれるぞよ、合點がいたか、今にも直さにお嫁になる身体じやから、せい出して學校へも

往き、縫ひ針も覺えにやならぬ、れ墓ぎわりは忘れても、學校へ往くのを忘れぬやうに、僧を請じてれ經は讀んでも、一本讀む聲を聞きたいぞや、最早や言ふこともこれでない、よう顏見せて給もれやとて、今死ぬる身もいとひなく、抱きしめて泣きたまひたるが、妾しや今見るやうに思はれて、最となつかしくれもうぞよ、此のやうな教訓をうけて、やうやくのことで人となり、此處にれ嫁に來たはよいが、其方のやうな不所存ものが、出來やうとは思はなんだ、妾しのいふことが合點がいたら、最早や今度切り惡るきとするな、母から此やうに手を合せて、れ前に れ頼み申すぞや、れ前が學校へ往たからとて、少しも此母の胸は休まらぬ、今にも學校から尻は來ぬか、又れ詫びに出にやならぬかと、ソレは〳〵一通りの心配ではない、善い子になつてはめられて呉れ、ヨ、頼んだぞやと、母から手を下げての願みじや、なんと皆さま、此噺しを何んと聞かしやる、親が子をれもふやうに、高祖大師は操りかへし〳〵のれ示じや、卒爾に聞いては相濟みませぬ、靜かに思ひくらして、能く〳〵合點されたがよい、

第貳拾七席

（性證義第五章行持報恩第貳拾六節）

此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり今是の如くの因緣あり願生此娑婆國土し來れり見釋迦牟尼佛を喜はさらんや

此御贊題はいよ〳〵第五章の第二十六節でありまして、即はち行持報恩のことをれ示し下さるので、此行持報恩さへれ聽聞になれば、それで我が曹洞宗在家の安心が成就したのである、これを今始めより操かへして見ると順かチャンと極まッて居る元來は第四章の發願利生で行持報恩は具はッて居るのじやけれども、上に向ふと下に對するとの區別の上から、行持報恩といふのじや、行持とはれ經の中に十一も說かせられてあるが其中の第九番目が此行持であッて、一切殊勝の妙行を勤修すると無量無邊にして恒に厭足せざる是を行持と名づくとありて、一切万事につけて善いことを行なふて厭〳〵ことなきをいふのじや、報恩は文字の通りにて、恩に報ふることで報本反始といふことじや、夫から御文にうつりまして此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなりとれ示しなされて、世界の廣きこと無量無邊際の中にも無量無邊の國々の中に、四ツに分ち給はせられ、東に須彌山を中央として東方弗婆提といひ、西を西瞿耶尼といひ、北を北拘盧といひ、南を南閻浮提といふ、此四國〳〵の中で、南閻浮洲は釋迦牟尼佛に御緣の深い國で、已に身を淨飯大王の太子と降させた生ふ程の處である、ゆゑに此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなりとのれ示しであるのじや、然らは其他の三洲の衆生は如何にといふに、矢張り佛もあり衆生もあれど、たゞ發菩提心に緣が薄いから、多くは南閻浮の人身に發心すべきなりと仰せられて、決して菩提心が發せぬとは限らせたまはざるのである シテ見るも無上の菩提心を發すものは、多く此南閻浮にある、殊に今我〳〵の住居居る此地球、其地球のうちで今は此日本が一番佛法に緣が深い國たや、此日本が發菩提心のところじや、故に御文に今是の如くの因緣あり願生此娑婆國土し來れりとれ示しに相成りて、何時の前よりして此因緣をひすびしか、此娑婆は能忍又は忍土とて、諸〳〵の惡を忍び堪ゆる濁穢心や、夫で此國土に生れたいと願ふ、何でも日本を居場所と定めて、夫から五大洲に手をかけ、其かゝ他世界に濟度に出

かけやうとれもふた一念が熟して、漸やく願生此娑婆國土し來れる趣きをれ靈示に相成る、何んとうけたまはりて見れば、仕合な我やせもでは有りませんか、誠によろこばしいことである、故に見釋迦牟尼を喜ばさらんや、たとひ現に釋迦牟尼佛を見奉ることが出來んでも、一体三寶の道理と合點して、尚は此後世のあらん限り、其合點した道理を諸〳〵の衆生につかひ、共に俱に見釋迦牟尼佛とよろこぶのヒや何んと合點がいきましたか、一口にこれを申して見れば、國いいくらもあるけれど此娑婆國土の人間こそ、最上善勝の人身なので、佛の國に生れたいとれもつて、佛の國にうまれて來て、佛を拜見したと同樣、常住佛性の戒体を發得し、今も昔しもかはりのない、眞如の妙理が分ったかち、嬉しいことではないかとの意味ヒや、譬へば皆さまが願をれてして、永平寺には高祖のれ舍利を收めてあると聞く、一たびはれ參りを致して、れ舍利なりとも拜みて歸りたいとれもふて、先づ初めに此願ひを發し、今年は參ちふ來年は參ちふ、サレ今年もれもふたばかりで參られなんだサア來年こそとれもふたれば、此來年もいつにか來て、又餘年にさへられて仕舞よ

た、來年は來年はと、思ふたばかりで死んで仕舞ひ、又此願を果さんためにこ又人間に生れて來て、又來年も來年もで、又死んで仕舞ひ、幾たびか生をかへて參うやく、永平寺に參詣して、承陽殿へれまねりを濟したやうなものヒや、御正成か淺川にて討死の時に願くば、七たび人間に生れて逆賊を亡ぼさんと言れた通り、正成の業法か何處までも相續して、遂に足利氏も亡びて仕舞ふた、皆さまも御一念から幾たびもうまれかはり死にかはりて、やうやく今の世で永平寺參詣が濟んだと同樣此娑婆國土に生れ來て、見釋迦牟尼佛をよろこばるゝとは、實に善勝な人身なのヒやから、分けても宿善をよろこばねはならん。

昔し加賀の國に一人の少年がありまして其名を藤吉と呼びました、五ツの時に母に別れ、六ツの時に父が負債の爲めに家を出でゝ、祖母の手に育てられて居りました今はやうやく十歳になりまして、物心もついてまゐりましたから、或る時祖母にむかひまして、私し五ツの時に母さまに別れ六ツの時に父さまに別れまして、少さい時とは申しなから、何の氣もつきませず、只〳〵さびしい〳〵て今日まで過ごまし

たが、今日は裏の子供の肆りひを始めまして、〳〵其子供の親に夫窓を打かれ、はかやうに郷まで出來なれましたが、これたつけても私心配ッ父さまでもわるることなら、あなに馬鹿にもされまいと思ッて、口惜しくてくやくて堪りませんが、一体父さまは何處にれ在でござりますか、何卒ぞ教仏て下さりませと、涙流して尋ねますと、祖母は胸一ぱいになりまして、俄かに痩に若むひ様子、藤吉は馴れぬことゝて只泣きまはるのみなれば、祖母は苦しゐ中より水を〳〵といふを聞きて、藤吉水を持ち來たり、祖母の口に含ますれはやう〳〵に痛さをこらへて、ヤレ藤吉いつも〳〵ねと、なしい其方、何を悪るいことをして打かれたぞ、常〳〵に能く此祖母のいふことを聞て、今までは能く遊んだり、仲よく朋輩と手習もして居たのにさ、何をわるいことをして打れたか、有やうにいつはりなく此祖母にいふて聞かせ、藤吉は有やうに私しが何んにも致ませぬけれども、向ふから轉んでたいて、私しが轉ばしたと言ひますから、オヤそれは咥だ、れ前さんが轉んだのだと、いくら其譯しても承知せず、ソンなら私しが致たとして、堪忍して下さいと、詫びて居ますと其ところ

へ先きの親がまゐりまして、いきなり私しを此やうにと、言ひた切ふシク〳〵と泣て居ります、祖母も涙だを流して、オヽ、ろうか、可愛ろうに〳〵、れ前までを馬鹿に仕居ッて、太い奴等だこらへて居よ、れ前が馬鹿にされるよりも、妻しが日に〳〵馬鹿にされて、言ひたいこともあるけれど、ジッと辛抱して居るぞよ、堪忍せよこらえて居よ、今にも父さまが金をもつて、歸ッて來てれ呉れだから、少しの間だ忍んでれ居よ、此祖母もこらえるからよと、泣く〳〵賺しなぐさめれども、藤吉は冠りふりて、どうしても父さまのところへ往きたいものをと、父が居ぬところを頻りに尋ねますから、祖母も今は詮方なく、れ前は其やうに逢ひたいか、父はな、遠い都い往ッて、せッせと稼いでれいでだらふが、居ぬところは分らんよ、待ッて居れば今にも來るから、祖母と一所に待ッて居よ藤吉は尚はも承知せず、頻りに往きたいと申しますから、コレサ分らぬ子ではないか、都と言ッても廣いところで、尋ねることも出來ないのじゃ、ソレにれ前は父さまの顔を知ッて居るか、知らないだらふ、知らないければ尚更のことじゃ、待ッて居ッたがよいではないか、イヤ〳〵顔

は知らないでも、父さまが私しを知ッて居りませふ、是非やッて下されませと、どうしても承知せねば、祖母もいよ〳〵断念らめまして、夫れはどれもふて居やるならば、此祖母も連れにならふ、悴れが居らぬ其ためにに、村中のものに馬鹿にされて此様なところに居やうより、家財諸道具を賣代なして、れ前と一所に悴を尋ね、親子三人打揃らふて、どんなまづしい暮しでも、必ろ安く暮したい、一日二日待ッて居よと、是より出立の準備にかゝり、四五日を經て準備も出來ましたから、サア藤吉やど手を引きまして、東都をさして上りました、今なら流車で早いけれども、昔しのことで道捗ゆかず、早や幾日か重ねたれども、やう〳〵碓氷の峠をこえて、松枝の驛までまゐりますと、祖母は時候の障りにや、始めは何の心ろもつかず、只薄す寒いとれもふて居たれど、六七丁も過たかとれもふころより、足も運ばす倒れました、驛のものゝ介抱によりて、やッとのことで泊りまで連れゆきましたが、これが定命か此驛にて、草場の露と消えました、サア藤吉は杖にわかれ、明日よりは如何にせん、途方に暮れてたゝ泣くばかりであります、村役人の憐れみに依りまして

祖母の亡骸を火葬になし、骨を背負て此驛を出立し、西か南か東か北か、宛途もなく都をさし、憐れな姿で歩ひはじに、高崎といふ城下迄で來ると、悪漢に出あひまして、小僧マア れ前は何様したのじや、何だか見すぼらしい形容ちじやが、背負て居るものはソリャなんじや、ナニ祖母の骨だ、デは祖母が死んだのか、ナニ松枝で死だ、ソレは可愛そうなことをした、シテ懐ろが大きいやうじやが、金など持ッて居ると盗られて仕舞ふぞ、シテ今夜はどこへとまる、マダとまるところもない、デは此爺がとめて遣ふ、それかられ前は何處へいくのじや、ナニ都へ父を尋ねて、ソレは〳〵可愛そうじや、デは此爺が泊めてやッて、れ前を怪我のないやうに父のところへ連れていつてやらふ、オヽ可愛そうにシテ父は何處に居るのじや、ソレは知れんとな、ソリャ困ッたものじや、オヽヨイ〳〵此爺がよいやうにしてあげやうサア爺と一所に此内に寢るのじや、ナニれ銭はかけさせないよ、今夜は爺が賄なッてやるのじや、安心して居たがよい、藤吉は此夜此悪漢に賺されまして、トー〳〵懐ろを皆な盗れて、明朝に至りますと、夜前の爺は居りませんから、コレ〳〵の次

弟でムりますと、宿の主人に嘶しますと、此主人は甚だ親切な男でありまして、ア
は私しが都まで、私用もあるから連れてゆかふ、サア來いと直ぐに支度を致しまし
て、都まで、連れては往きましたが、扨困ッたことには送りとゞけるところがない
聊かな金を惠みまして、乞食をしながら尋ねろと教へまして、涙を溢して別れまし
た、藤吉も涙を流して紅葉のやうな手を合して幾度となくれがみまして、其場は泣
くなく別れましたが、サテどちらへ向へはよいか、父は何處ぞ何の家にと、泣く
〳〵那地此地尋ねれども、十日たつても影も見ず、二十日たつても聞人もなし、飽
くね果てゝ居るところへ、血筋の縁か向ふから來る人に突當られ、オヤ〳〵小僧地
忍れしよ、ッイ脇見を致たもんだから、其代り詫びにと、少々はかりを惠まんと
して、懐ろを探りつゝ、藤吉の顔をつく〳〵見て、コレ〳〵小僧、お前はモシや藤
吉と言やせぬか、ハイ藤吉と申します、ナニ藤吉、デは私しの子ヒやどや、此私し
か親ヒやどや、オヽ父さまか、逢たかッた〳〵、オヽ嬉逢たかッたであらふ、已れ
も逢たかッたと兩人は人目も分かず抱きあひて泣ましたが、嬉逢たかッたであまま

せうや、此因縁につきましても、過去より關ッて此土に生れ合せ、見佛をよろこび
ますのは、藤吉か逢たい〳〵の一心から、ヤ〳〵此處で逢ひましたのも一向かは
りはありません、うれしいことではありませんか、

第貳拾八席

（性證義第五卷行持報恩第貳拾七節）

靜かに憶ふへし正法世に流布せさらん時は身命を正法の爲に抛捨せんことを願ふ
とも値ふべからす正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし見すや佛の言はく無上菩提を
演説する師に値はんには種姓を觀ることなかれ容顔を見ることなかれ非を嫌ふこと
莫れ行を考ふること莫れ但般若を尊重するが故に日日三時に禮拜し恭敬して更に
患惱の心を生せしむることなかれと

サテ此御贊題は修證義の第二十七節、前席の見釋迦牟尼佛を喜ばさらんと仰せられ
しを、靜かに憶ふへしとれうけなされて、扨如何なればよろこぶべきであるか、其
わけは正法世に流布せさらん時は身命を正法の爲に抛捨せんことを願ふとも値ふべ
からすとの仰せじや、デはしや南閻浮洲の中の此一地球へ、願ひに願ッて生れて來

たにもせよ、正法世に流布せんであッた時には、どんな次第であるのじや、佛前とか佛法滅盡とか丸で無佛の世の中であッた日には、何ともはや致しやうのないことじや、靜かによく〳〵思ふて見れば、誠とに好い時に生れあはせて、無上道の流布せられてある今日にパタリと逢ふて、一寸指を屈ッて見ても、我が日本はかりでも壹萬五千もある曹洞宗のれ寺じや、何地のれ寺へ往ッても正法を聞くことが出來る去れば命を正法の爲めに捨てゝも遇はれぬ程の難義な道中もあッたのに、今は易す〳〵と聞法の境界になッて居る、それをれもふて見れば、喜ばさらんと欲するも、喜こばんでは居られぬでないか、又御文に今日の吾等を顧ふべしと仰せらるゝは、此正法に逢ふて斯く佛けのれ仲間にもなッたから、何んたる此身の仕合じやと、歡喜踊躍すると同時に、他人にも正法を傳へて、よろこばせにやならぬことじやとのれ示しじや、ソレから次ぎの御文には、此正法を聞くにつけては、聞くべき必得をれ示し下されて、見ずや佛の言はく無上菩提を演說する師に値はんには種姓を觀ずることと莫れ容顏を見ることと莫れ非を難ふことと莫れ行を考ふることと莫れとのお言葉じや、れ經の中にあるれ言葉をれ引合なされて、見ずや佛の言はくと證據を立ッて、正法を說く師に値ふたときは氏素性の善し惡しを言ふことなく、顏かたちの醜くい奇麗に頓着することなく、あの人は行なひが惡るいの、此の人は不具じやからのと種々雜多の撰り好みをしてはならぬ、それはナゼかといふに、只般若を尊重するが故にと仰せられて、無上の法を尊重してそれを聞きさへすれば、何にも顏かたちや行ひの惡るいことを氣にせんでもよいのじや、じやから朝夕晝と三時に禮拜恭敬して、佛けの智惠の尊いことをれもふがよろしい、

譬へば病人が醫者にかゝるやうなものじや、れのれが今死ぬばかりより外仕やうのないやうになッて居る癖に、那の醫師は品行が惡るくていかん、此の醫者は隻眼じやから面白くない、ヤレ彼れは機多同樣の奴じやから、かゝるのは止しにするとか何とか角とか道理をつけて、藥りも服まずに居るやうな次第じや、何のことじやかい一向わけが分らぬ、顏はどうでも、品行がどうでも、又は氏素性がどうでもよい、只醫者といふ道に堪能な人でさへあれは、病氣は必らず癒してくれる、尤も定まれ

る業で死病なら仕方がない、うれはどんな名醫でも匕の取りやうがないけれども醫者の力で癒ることなら、どんな顔かたちでも構はんから、早やくかゝッたら宜かろふ、何にも氏素姓で威張らんでもよいだらふ、丁度正法を聞く師に値ふもかやうなものじや、氏素性や顔やかたちを忌み嫌ふて、高尚な大切な道理をうけたまはらぬといふは、余程つまらぬ人間じや、併し天竺などでは、酷く此氏素姓をやかましく言つたと見ゐて、釋迦如來は天窓からこれを小言遊ばされました、日本でも矢張り惡るい癖がついて、種姓を兎や角と申します、甚だ惡るいことじやけれども、ドーも此癖は容易に改まらない、緣組や親類緣者となるには、ドーも致し方ないとして師として學ぶに何の仔細がありませうぞ、親鸞上人が御弟子をつれて、常陸の國富日野左衛門か門に至られまして何ぼう泊めて呉れろと賴んでも、中々承知して呉れませぬから、御弟子と三人で石を枕に、其門内に一夜を明されました、スルと雪は綿をチギッて拋るやうに、酷く降ッてまゐります、寒さはいよ〳〵肌に徹りして堪ゐることが出來ませんから、御弟子方は泣だを飜しまして、ア、是の有樣は何と

いふことじやらふ、誰れあらふ天小屋根の命、藤原の末裔ともあらせたまふ御身をもッて、此雪中に此御苦難、れ痛はしう存じ侍ると、一人がなげきますと、一人は已れ憎ッくさ日野左衛門、如何に人情知らずといふとも、個程までとは思はざりしが、いで某が門を破りて、直〳〵に宿からんと、息まき荒く猛りますから、上人は二人をれ叱りなされて、是れ〳〵、其やうなこといふものでない、都こから斯樣なところまで、氏素姓を言ひには來ぬぞよ、恥曝しな嘸して居れ、茲の主人のやうな慳貪なものを憐れみて、こんな寒い目にも逢ふのじやないか、憎いとれもふものは一人もないぞよ、堪いて居よと御教訓なされた、二人はれ詮しに伏しまして、其夜は其處に靜として居りました例しもあるのじや、何も氏素姓で威張らんでもよい又氏素姓をやかましくいふて、無上な道を聞かんでは、實につまらんことではないか日蓮宗の開祖日蓮大菩薩は、殊更に下賤の家に御降誕あらせられて、衆生濟度を爲されたといふが、至極尊といことに存ずる、斯くてこそ菩薩の行願も滿足なれ、然るを其宗の人〳〵は、これを兎や角と言ひ拵らへ、我高祖は決して下賤の素姓では

ない、悉じけなくも何の某で候と、種姓のあらそひをいたしますが、一向我等には分けが分らぬ、釋迦如來が種姓を論ずるをれ叱りなされ、親鸞上人が系圖自慢をれ叱りなされ、何れもれ嫌ひ遊ばさるゝ程な、氏や系圖のことじやから、日蓮上人の如き御方が、何も御存じないこともなからふ、佛菩薩のれ仕事からは、何を遊はすとも勝手次第じや、氏や素姓をいはさぬ爲めに、わざ〳〵下賤の家に生を托してシテ、念佛無間禪天魔、眞言亡國律國賊、一天四海皆歸妙法と大層な看板をれかけなされた、何を苦しんで下賤の者の子ではないなどと、辨護するのじやか分けが分らん、これを最負の引たをしといふのじや、兎もあれ千部會や會式の時に、池上や堀の内の賑はひはどうであらふ、並夜とも瀧車は臨時を仕立て、横濱の方面から東京の方面から、群つまる人は何十万人か分らない、下賤の系圖でも皇族の後裔でも其やうなことは構はない、此やうな歸依をうけさせたまふは、抑も〳〵何の故であらふ、誰れか眞似人がありませうぞ、斯かる道理が分ッたら、氏や素圖を屈托せずに、般若をよろこびて尊重して、更に煩惱の心を生せしむることかなれ、

第貳拾九席

（修證義第五章行持報恩第貳拾八節）

今の見佛聞法は佛祖面々の行持より來れる慈恩なり佛祖若し單傳せずは奈何にしてか今日に至らん一句の恩尚ほ報謝すべし一法の恩尚ほ報謝すへし況や正法眼藏無上大法の大恩これを報謝せさらんや病雀尚ほ恩を忘れず三府の環能く報謝あり窮龜尚ほ恩を忘れず餘不の印能く報謝あり畜類尚ほ恩を報す人類爭か恩を知らさらん

サテ此御賛題は修證義の二十八節の前席のれ示しをれうけなされて、今かやうに師に値ふて、身命を捨て願ふても正法に逢れぬとさはどうしても逢はれぬものを、易す〳〵と疊の上で聽聞することが出來る仕合な此身、此よろこぶやうになられたはそも又なに故に然るやといふに、今の見佛聞法は佛祖面々の行持より來れる慈恩なり佛祖若し單傳せずば奈にしてか今日あらん、若しも釋迦如來御出世なくば去來知らず、已に一大事の爲めに御出世なされて、難行苦行を重ねさせられ、漸やく仕上ッた無上道を、ろつくり其まゝ迦葉尊者に傳へさせられ、それから段々と單傳相承

させられて、今日の吾れ〳〵まで相續と相成ッた、此行持の勝れた、妙行の慈恩がなければどうして見佛聞法をよろこぶことが出來ませうや、これをれもひば一句の解釋を承たまはッたばかりでも、其御恩をかへさにやならん、一法のれしねをうけたばかりても、其御恩をかへさにやならん、ましてや釋迦如來より段々と御傳あらせられたる、正法眼藏の無上大法をうけた大恩は、如何にしても報じにやならん病雀尚は恩を忘れすとは、揚貴に助けられた恩を報せんとて、白玉を揚貴に捧げ御子孫はかならず三公の位ゐに登らせたまふ、決してうたがひあるべからすと申したるが、實に其告げの如く、四代とも三公に登りました、窮龜尚は恩を忘れずとは孔愉に助けられた恩を報せんとて、餘不亭侯の印の龜の首が四たびまで左りよ傾き四たびまで鑄直させましたが、孔愉はじめて氣が付き、オヽそうじやと膝をうつて成程餘不亭で龜を助けたことがあるが、アノ時四度び振り向いたことがあると思ひ出し、四度目の首の曲ッた儘に存して置きました、鳥魚ですらかやうなやうに、助けられた恩は報するものを、万物の靈長と自から名乘る、此人間であるからには、

無上道の眼玉といふ、正法眼藏をうけた御恩は、如何にしても報謝せねばならん、譬へば命ちはぞ大切なものはないが、恩をうけた上からは、其大切な命も何とも思はずになるやうなものじや、雪山童子が雪山の中を吟よひたまふ時に、谷のはとりに諸行無常是生滅法といふ聲が聞え、ハテ何者であらふか甚だ面白きことをいふたあのあとを聞たいものじやと、谷の底に下りて見らるゝと、鬼神が居りましたから側へお寄りになッて、今諸行無常是生滅法といふたはお前さんかい、左樣私しがいふた、オヽうであるか、あれではまた盡ないやうじやが、其あとを聞きたいものじや、れしねて貰ふことが出來ますか、左樣、れしゆることは敎ゆるが、近來久しく生の肉を喰はぬから、空腹でいふに言はれぬ、イヤ敎えて下さる事ならは我身を進上いたしますから、それでれ腹を滿して下され、左樣かそれではいはふと生滅々巳寂滅爲樂といふて、サア約束じや喰して呉れいといふて、大きな口を開きますから、童子も其恩に報いまして、口の中へ飛び込まれました、なんと人類爭か恩を知らざらん、若し此恩を知らんければ何んに譬へやうもありません、病雀や窮龜でさ

へ能く恩を報ずるではありませんか、いかさま、恩を得ながら其恩を報せんければ畜生よりも甚だしきぞと、論の中にも誡しめられてあるが、蚊虻虱蚤の少さき虫けらでも、其恩に報じた例しはいくらでもありますのに、人間が恩をかへさぬやうでは、畜生にも劣るといはれても、どうもいたし方がありません、

昔し唐土に薛嵩といふ人がありまして、生れつき慈悲ぶかい人でありましたが、此人はたとひ假りめにも物の命を取りませんでした、よしや蚤虱の類ひでも他に一疋も殺したことがありません、然るに或夜のゆめに、夥多しい虱どもが、寢て居る襖の上に這ひあつまり、ウヨ〳〵として居りましたが、見て居るうちに忽ち變じて、一寸ばかりの人間の形ちになりました、時嵩は夢のこゝろにも、ハテ不思議なことゝ思ひまして、アラ〳〵奇怪千萬のことよとて、目も離さずに眺めて居りますと、又其一寸ばかりの人が次第〳〵に殖えて、群かり集ふことおびたゞしい、大方勢揃ひも濟んだと思ふ頃、一同薛嵩が前に頭を下げて、手を突きていふやうは、吾れ〳〵どもは日頃君の御恩をうけて、持ちかたき一命を助かりました其うへに、剣さ

へ君の生き血を吸ひ取り、又は君の肉を喰あて、常ね〳〵飢を凌ぎまして、能くも厚き御恩を蒙むり、今日まで生命をたもちて居りましたが、今夜は君の御身の上に、危うき御難がありますから、數ならぬ吾れ〳〵どもなれども、何れも心ろを一ツにして、今宵こそ平生の御恩に報じ、一命をさしあげて、只今御身がはりにまいりました何卒れゆるし候へといふかと思へば、ヒラリと剣の光りを發して、一刀下だると見る間もなく、一寸ばかりの童子どもは、何れも頭を落されたり、アッと驚ろき聲を立つれば、我が聲に我が驚ろき眼をさましてハテ不思議と、枕のもとの燈火を掻きたて〳〵、傍ばらに寢て居りまする、童子を搖り起しまして、事の樣子を見せますと、何れも替つたことはないといふ、扨も不思議な夢もあるものかなと、思案にくれて居りますといふと、夙と襖の上に眼をつけました、能く〳〵見ると糸を引たやうな鹽梅に生血の痕がついてありますから、ヤ、是れは何じやと思ひます聲を聴ちしました、其長さは一尺あまり、尙は能く見れはこと〳〵く皆虱みじや、薛嵩甚だいたはしく哀れにおもひまして、是れは〳〵何としたことじや、何の爲めに一同

切られたのじや、頻りに不憐にれもひましたが、詮かたもないことじや、後に様子を聞て見れば、常に薛嵩をそねむ人があります、其夜家來のものに言ひつけて、首尾よく薛嵩を殺して來たら、褒美の金は盆に山と、利を喰はせて刺客を放ち、名劍をあたへて赴むかせました、スルと刺客は細き燈火のかげに、薛嵩を確かに見屆けおきて、イザ一刀にと切りつけました、確かに手答ひ大丈夫、仕損じたりとは氣もつがず、スタ〳〵と歸りまして主人に噺します、スルと主人に白刃に生血のつきたるを見まして、オヽヤッたか、出來した〳〵とよろこびました、然るに薛嵩は何の仔細もなく、翌日恙がなくてありましたから、扨も〳〵薛嵩は此世にあらぬ人なるよ、何のことか分らない、ハテ面妖な事ではあると、主從は更に其仔細が分りません、シテ二日三日と立ちますうちに、誰れがいふともなく、虱が薛嵩の身代りに立ちたりとて、其評判取り〳〵であります、薛嵩は虱の爲に助けられた、イヤ虱が恩に報いたのじやと、一時報恩論が行はれしといふと、劉氏鴻書といふ文に書いてありますが、皆さま如何やうにおもはれますか、恩をうくれば虱でも報ひます、

じやから曹洞宗の信者ならば、行持報恩を忘れてはなりません、

第參拾席

（修證義第五章行持報恩第貳拾九節）

其報謝は餘外の法は中るべからず唯當に日々〳〵の行持其報謝の正道なるべし謂ゆるの道理は日々の生命を等閑にせず私に費さゝらんと行持するなり

サテ此費題が修證義の第二十九節、報恩の仕方をれ示し下さるのじや、前席に報謝せよと仰せられしをおうけなされて、其報謝は餘外の法は中るべからず、餘外の法は報謝に中らない、骨を摧きても報ずべしとはいはぬ身を粉にしても謝すべしとはいはぬ、其やうに六ケ敷いことではない、そんなに苦にせんでもよい、唯當に日々の行持といふて、爲ること作すことが佛法にかなひさへすれば、それでよいのじや佛法にかなふとは、善を修して惡をなさず、日々夜々職分〳〵を守りて、職分のまゝに行ふのが、其報謝の正道であるのじや、じやから謂ゆるの道理は日々の生命を等閑にせず私に費さゝらんと行持するなりと仰せられて、唯大切なは此命ちじやから、此命は粗末にせず、私と自分勝手に、曲ッて居やうが屈ッて居やうが、何でも

おのれが好でさへあれば仕たい三昧に無駄に月日を送ッて、それで済むものではない、じやから私に費さゝらんと行持するのでめる、

譬へば均しく同じ銭をつかふのであるが、つかひやうにも幾らもあるがごとく、放蕩遊惰につかひなくすと、親孝行につかひ減すとのやうなものじや、女郎買ひや藪者狂ひに、何ほど費やしたからと言ッて、何の爲にもなりはせん、自分のものを剣でもつかひ、親を苦しめても他人に迷惑をかけていでつかひ盡し、兄弟のものを剣でもつかひ、親を苦しめても他人に迷惑をかけても、平氣になつてつかふのが放蕩の常じや、果は善い名は立たず悪い名ばかり、蛭をと小さくなるのか、人間の持前じや、これに引かへて親孝行の心を發して親父は甘いものが好じやから、土産には金平糖でも買ッて歸らふ、斯樣な丁節であると怪我がなくてよろしい、シテ又おあしもたんとはかゝらぬ、世間へ迷惑をかけんでも済めば、兄弟を泣かせんでもよい、他からは孝行ものよと稱えられ、善人よと呼ばるゝことじや、其損得は何ほどじやか、其距離の遠いこと實に千萬里じや、此生命

が萬年もあるやうに、好なことばかりで日を送ッちやならぬ、私しに貴さんやうにするがよい、左りながら一ッ聞き損なふて、よいことさへすればよい、是れも高祖のれ示し通りじや、あれも大師のれ示し通りじや、日々することが悪にさへなちんければよい、此れが行持報恩じやと、何んでも爲めにさへなればよいことゝれもふと、飛んでもない間違ひを起すものじや、相模から下女を置いて、常に掃除をやかましく言ふたら、ハイ〳〵と能くいふことを納て、勝手元の掃除もゆきとゞき、座敷の掃除も届いて來たが、一日主人が机の上に、反古同樣な書物をならべて、風と外出いたしたから、下女は小言たら〳〵で、何だねへ茲の旦那は、あんなにやかましく言ふ癖に、此机の上は何じやらふ、斯樣な汚ないことをして、それで人のことをやかましくいふが、誰れも口ではいふものじやが、扨自分では其樣はいかぬものじやと、主人が歸れは讃めるやうにと、机を奇麗に片付けたが、ナア大變じや、主人が歸ッて來て机に向ひ、コリア〳〵、此机の上を片付けたのは誰れじや、下女は讃められることかとれもッて、ハイ夫れは妾くしが片付けました、ナニ其方が片

付たと、飛んでもないことを仕居ッた、大事の順が皆くるふて、これをまとめるには大騒ぎじゃ、馬鹿な真似をいたし居ッたと、眼の玉の飛び出るほど叱られた、其逆皆さま方にろんなことはあるまいが、何ぼ今日爲すまゝが、行持報恩となるのじやと言ッても、此下女のやうな間違ひもわりますまい、

昔し唐土に曾參といふ人がありました、南武城といふところの生れで字を子輿といひました、孔子大聖人といはれた方のれ弟子となッて、年も孔子より四十六若かッたといふ、彼の唐土の二十四孝といふて、其中の一人ほどである大した親孝行の人でありました、去るに依ッて孔子も曾參の爲めに孝經を作られたといふ、かやうに名高い親孝行の人じやから、此事が齊といふ國へ聞いて、使ひを立てゝ曾參に申し入れますには、何とぞ貴君、齊の國へ來て下さるまいか、貴君を鄕太夫の位につけて、國家万民の手本に致したいと、主人の望みでござります、何卒ど願ひを叶へて下されとありましたが、曾參は中〳〵聞き入れません、父母在す時は遠く遊ばずの道理じやから、親に離れて他へ行くことは、決して此身の望みでない、其うへ人

の祿を食ふときは、人の事を憂ひ愁じひ、よしや我が身に覺度なくとも、主人の任落ち朋輩の不調法、如何なる難儀に逢ふも知れない、若し其難義にあふときは、吾身の上の苦しみよりも、れ年寄られた親にさぞ難儀をればはし、アヽせまじきものは宮仕へじや、サテ〳〵望ひところに非らずと、いつかな承知いたさんから、是非なく使ひも歸りまして、主人に其由を申しますと、齊主も是非なしと斷念らめまして、曾參は朝夕の隔てなく、両親に孝行いたしますうち、母親に訣れまして、父繼母に仕へましたが、孝行は露ゆほどもかはりませんから、繼母もまた有り難きことにれもひ、一家波風立つことなく、丸く治まつてまゐりましたが、或時曾參の女房が、藥の半熟を料理して、繼母に進めて居りますところを、曾參が見付けまして、大層に立腹いたされ、即座に暇をやるといふ大騒ぎが始まつた、依つて人〳〵があつまりまして、コレ〳〵曾參どの、これは平生にも似合ぬことじや、れ前さん常に何といはしやる、總じて女房を去る時には七去といふことがある、一ッには父母に順はず、二ッには子のない時には去る、三ッには淫乱なるは去る、四ッには嫉妬な

るは去る、五ッには多言なるは去る、六ッには多欲なるは去る、七には病かに咎めするは去ると、平生言はるゝことではないか、黍の半熟を進むるは去るとは何處にある掟でありますと、理屈を並べて申しますと、曾參は中〳〵其樣なことで承知いたさんから、手を替へ品をかへて、段〳〵と詫言すれども、一向承知いたさんで、皆さまの折角のれ詫聞き入れて承知すれば、うれで濟む次第なれども、我が女房には日頃より人の人たる道を敎ゆて、れのれこれを守りもいたし、また守らせもいたしたれど、今までは仔細もなく、能くして呉れるとれもふたが、何ど聞き違いていたしたことか、彼れも人間であらふのに、末始終まもれぬとは、言ひ甲斐なき女である、大切な命ちを繋ぐ、食物の半熟なるを、義理ある母人へ進らす自墮落者、此裘を能く熟る位ゐは、左のみ身に骨の折れることでもない、別に大層なことでもない、少さなことさへ遣り放しにするやうでは、大層身に骨の折れることでは、御は更せぬは知れたことじや、斯る女房は入りませぬと、終に追ひ出して仕舞へまして一生女房を持たんかつたといふ、成程些細なことのやうじやが、能く考へて見るど

ひふと、日々喰べる食物のごとむや、命を繋ぐ大切の食物じや、夫れが半熟であひ丸日には、胃病を起すとか腸を痛めるとか、過てか身体に狂ひを生じて來る、喰べものは矢張り喰べものゝやうに、熟る度合まで煮た上で、そうして喰べるやうに出來んければ、一日の行持が滿足とは言はれぬ、何で報恩となりませうど、樽尾の明惠上人やら仰せられたことは、あるべきやうにといふのが、算術をやらかせは二二天作と間違ぬやうにすればよし、鋤を持つたら作物のさわりにならぬやう培かへ、杆を取れは綿の曲らぬやう、飯を焚くには焚くやうに剛くも柔らかくもなく、身体によろしきやう、菜を熟るのも煮るところまで煮るといふやうに心ろかくるのが行持報恩じや、何も六ケ敷いことはないのじや、只あるべきやうにと、曲り屈らぬやうにするのが、そつくり其まゝが行持報恩じや、儒者學で仕上げた曾參じやから、女房も追ひ出したかは知らねど、我佛法の上からは尙は更不愍におもつて、敎ゆる上にも敎えて、間違ひのないやうにするのが、行持報恩の妻たじや、じやから相摸下女の仕打も曾參の仕打も、扨は曾參の女房の仕打も

決して、よいとは讃められない、此の道理を能く〳〵明らめて下されや。

第参拾壹席

（修証義第五章行持報恩第参拾節）

光陰は矢よりも迅かなり身命は露よりも脆し何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日を復ひ還し得たる徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり悲むべき形骸なり設ひ百歳の日月聲色の奴婢と馳走すとも其中一日の行持を行取せは一生の百歳を行取するのみに非す百歳の佗生とも度取すべきなり此一日の身命は尊ムへき身なり貴ふべき形骸なり此行持あらん身心自からも愛すべし自からも敬ふべし我等か行持に依りて諸佛の行持見成し諸佛の太道通達するなり然あれは則ち一日の持行是れ諸佛の種子なり諸佛の行持なり〳〵

茲ニ此贊題は修證義の三十節で、前席のお示しをおうけになつて、更に御親切なお示しである、生命を粗末にしては、なら悪い、光陰は矢よりも迅かなり、實に日月の去るは早いもので、矢でも彈丸でも及ぶことでは、ない、其侍なわれて居る此身といつたら、實以て今日にも知れぬ身の上、夢ぞ幻ぞ、明日なき命ぞとながら、虫たの逢瀬も契るはかなさ」であるが如の、露のやうな命お慰や、風前のともし火じやは、平生口癖に言つて居るけれども、さて實際には其やうに思はぬから、又あひ虫せうなと、別る〳〵時の言葉をのこす、露は如何なるものかといへば草の葉を土臺にして宿つて居るもので、其土臺が毛ほどでも動いたら、直ちに散ずて仕舞ふものじやけれども、うれよりもまだ脆いは此身命じやと、重ね〳〵戒しになるを、何とも氣が付かずに居るやうでは、實に汝沙の限りじやあるまいか、如何なる方便をめぐらしたからと言つて過ぎ去つた光陰を取りかへしたものは一人もない諸佛諸祖のやうなれ方々でも是はかりは仕方がない、じやから空しく百歳の長壽をしたからとて、虫けら同樣で長壽をしたなら、恨むべき日月ではあるまいか悲むべき身命ではあるまいか、若しも此百歳の長壽をたもつうちに、耳に逆入る聲と眼に觸るゝ色どのやうな、聞きたくない聲じや、ア、聞きたい聲じやア、美くしい子じや醜くい子じや、甘くないとか、不味いとか、着たいとか飲みたいとか、月日の奴隷になつて日々の事にあくせくするうちにも、一日だけ結構に暮せたら、うれが實

に結構なことじや、一日の行持を行取せば一生の百歳を行取するのみか百歳の他生をも度取すべきなり此一日の身命は尊ぶべき身なり貴ぶべき形骸なり、一日の行持でさへ百歳の生涯を行ひをなしたにあたるから、一日でも殊勝な妙行が出來れば、其效能は大變なものじや、百歳の後の世も又其後の世も他を度する導師じやかち、我身ながら今生の此身を貴ひ敬まはねばならん、又更に考ふれば、我〳〵どもが此殊勝な行持をするのは、過去の佛け樣方が行持なされましたが、今見成して持行をするのである、又過去の佛け樣方が踏ませられた無上道を通達するのじや、シテ見れば千歳萬歳後の諸佛になる種子も行持も、今生の一日の行持から胎んで行のじや譬へは三種の神器のやうなもので、御代々の天皇樣から、段〳〵とれ傳へ遊はされた、今上陛下に至つたような譯じや、九五の位にれ登りなされるには、必ちす免帝よりこれを受けさせられて、今上陛下に至りてそれが見成しである、今上陛下また皇太子御即位の時になると、又これを傳へさせられ又其次〳〵と段〳〵あつりて、何時までも絶ゆる期なく、「君か代は千代に八千代にさゝれ石の巖となりて苔のむ

すまで」、かやうな次第なものじやから、一日の行持でも、滿足につとめて貴ひたい昔し唐の玄弉といへるれ方は、天竺にて佛菩薩の說かせられた、其經論を翻譯いたろうと思しめして、十萬八千里もあるところを、態ざ〳〵渡天いたされましたが、今の世なら滊車もあり滊船もあり、滊船でゆかるゝところは滊船でゆき、滊車でゆかるゝところは滊車でゆくから、左程の痛辛もあるまいけれども、それが何しろ昔しのことで、どんなに苦しい旅であつたか、今から思へば身の毛も卓立はどじや、始めは同志の者二十四人と聞えて、勢ひよく渡天を企だてられましたが、流沙川といふところまでゆくと、二十二人は長途の難儀な道の爲めに、あたら命を隕しまして、惠敎と玄弉のれ二人になりました、然るに其惠敎といふれ方も、葱嶺山といふ山を越ゆる時に、寒氣實に堪ね難く、是れでは迚も叶はぬとて、自から衣を脱せられて、玄弉に授けられまして、茲で命を隕されたから、玄弉れ一方となりました、然れとも勇猛の精進終に空しからずして十八年天竺に居られまして、經律論の三藏を支那の言葉に翻譯されました、これは新譯舊譯といふことがありますのは、後漢

の世の左義長の時分に四十二章經等を譯されたる、彼の摩騰法蘭法師等より、法華經阿彌陀經等を譯されし羅什三藏までを舊譯と申します、シテ其後梁の世唐の代にいたりまして、大般若經等翻譯せられたる玄奘、金光明經などを翻譯せられたる義淨三藏等は皆新譯の人と申します、れの〳〵詔のりを奉たまはりまして、一人の三藏は梵語を漢語に言ひかゆる、筆授人は文章を綴り合せ、証義者は義理の違へるや否やを吟味する等、かくの如きの役〳〵は、皆過去七佛の敎法も、翻譯弘傳せしといふ大權の聖者にいたして、固より一字一點も佛世尊の御意にたがはないことは、知れ切ッたことである、去れば一度の翻譯にて決して間違ふて居る道理はないけれども、大無量壽經の如きは十二度も翻譯仕替られたといふ、去れども言葉のかはりしまでにいたして、決して意味に違ふところはありません、最も早や此翻譯にゆきましては、諸〳〵の聖者たちが何はどれ骨折になつたか知れません天竺から震旦へ渡りて譯されたり、支那から天竺に渡りて學んで歸り來て譯されたり、斯樣にお骨折が段〳〵と積いて、終に經律論の三藏が備はりました、ソコデ日本からも入唐の

沙門も多くありまして、失れがまた此日本へ段〳〵と渡りて、今れ互ひに斯やうに佛世尊の御說法を其まゝ蔭にれうつしいたすと、少しも替らぬ所しも出來ればよい又迦葉尊者や阿難尊者の如く、佛世尊のお說法うけたると少しも替らぬ皆さまの境界、おもふて見れば結構な此席ではありませんか、此事は一寸二十八節にても申し置いたつもりだが、是れ皆玄奘なんどの諸聖者があらせられて、行持報恩の妙行をつとめられたお影じや、今此席の說法が又十万劫のちまでも、劫のあらんかぎり胎んでゆくので、どこまでもつゝくことじやとは、實に凡慮のはかるところでありません、どうぞ一日の行持たりとも、滿足につとめてもらいたい、

第參拾貳席

（修證義第五章行持報恩第參拾壹節）

謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり過去現在未來の諸佛共に佛と成る時は必ず釋迦牟尼佛と成るなり是れ即心是佛なり即心是佛といふは誰といふぞと審細に參究すべし正に佛恩を報するにてあらんサテ此御贊題が、いよ〳〵修證義の三十一節で、是れで結構いたすのであるが、扨

ハヤ長い間だであつたが、能くお飽きもなされず、能くお厭ひもなされずに、御参詣がつゞきました、ヲ此三十一節の御賛題は、第一章第一節と照應して居のじやから、前の第一節と併せうかゞひ奉まつると能く分ります、前席に諸佛の行持とか諸佛の大道とか仰せられて、諸佛といふお言葉が出ましたが、謂ゆる其諸佛といふのは釋迦牟尼佛のことである、ナゼ諸ろ〳〵の佛けたちが釋迦牟尼佛お一方のことじやといふに懺悔滅罪して受戒入位の境界に至ッたのが、即ち諸佛のお仲間になッたのじやらふ、諸佛のお仲間になれは、此在座の銘々が諸佛である、ソコで諸佛となつたからには、過去の諸佛同様の道を踏んで、發願利生行持報恩とあらはれて來たこれがソックリ釋迦牟尼佛のなされた通りじやから、釋迦牟尼佛と少しもかはらない我れ〳〵諸佛じや、故に直ちに指さして我れ〳〵を釋迦牟尼佛と仰せらるゝのじや、なんと驚いた有難ひことではないか、我れ〳〵お互ひの分際で、釋迦牟尼佛とは恐れ入つた次第じやけれども、其樣いふ道理じやから仕方もない、故に十方三世の諸佛菩薩は皆釋迦佛と申すことも出來る、此十方三世の諸佛菩薩は釋迦牟尼佛にならせられずば、未だ佛にはなッたのじやない、既に佛けと名のつく以上は皆釋迦牟尼佛とならせられたのじや、釋迦牟尼佛とは即心是佛じやとありて、此銘々が持ッた心ろの外に釋迦牟尼佛はないのじや、サア此心ろ即心是佛、此てゝろか直ちに佛けとはどういふわけじや、審細に參究して見んければならぬ、此即心是佛を合點して貰いたい爲めに、始め第一節より、終り第三十一節まで、是れ一ッに骨を折ッた次第じやが、よく〳〵參究して見るといふと、生を明らめ死を明らめた心ろのことじや、明らめたてゝろが正しく佛恩を報謝するのであるのじや、是れで前に振りかへッて第一節のれもひきを能く考へて御覽なさるがよい、譬へば貧ふた子をたづねると同じことで、餅りの家へ往ッて聞て見ても今日は一度も遊びには見えなんだといふ、向ふのうちへ往つて聞て見ても、矢張り同じことであッて、ハテ何處へ往ッて遊んで居るやら、何をして居ることやら、日が暮れても歸ッて來ず、夜が更けても歸ッて來んから、果は泣き出して近所の人を頼んで、鉦太鼓で迷子の〳〵の三太郎やアイと、夜から夜ッぴて尋ねまわると、ブッすり寢

入ッた脊中の子は眼をさまして、れッ母さん茲に居るよと、脊中で返事をしたといふ、是心是佛とは如何なることかとれもッて、審細に參究して見たらば、何處の誰れ〳〵といふではなかッた、自分のこゝろであッて、釋迦牟尼佛とも名けられ、即心是佛とも名けらるゝものであつた、箇樣に合點の出來たのは、ろも〳〵誰れの御蔭であつたぞ、何方の慈悲心から生れて來たぞや、

謹んで大日本帝國曹洞宗太祖能登總持寺開山佛慈禪師弘德圓明國師瑩山紹瑾大和尚の御履歴をたづね奉つるに、御俗姓は藤原氏越前の國多稱邑の人にして、人皇八十九代龜山院天皇の御宇文永五年戊辰十月八日の御誕生なり、初め國師の母にてれはしませし御方は、御年三十を超へさせたまひども、一子なきを歎きたまい、神に佛に祈誓をこめたれども、更に其驗しなかりしに、或時殺生の罪といへるは譬〳〵の罪の中にも別て罪深く、放生の善根は總ての善根の中にも別て功德多し、世に子を持たぬ者あるは、多くは前生に殺生したる報ひなりと聞き給ひしより、頻りに放生を行ひたまひ、一心に一子を授けたまへと、多稱の觀世音に祈りたまひし甲斐あり

て、程なく懷妊したまひしかば、愈々信心肝に銘じて、毎日觀世音菩薩を禮拜したまふこと三百三十三拜なり、又普門品を誦みたまふこと三十三遍づゝ、曾て一日も怠りたまはざりしが、國師御誕生の始めより、尋常の小兒とかはり、三歲の頃より南無〳〵と唱ひつゝ、佛を禮する姿をなし、五歲の頃にゝ母と共に普門品を讀みたまひける、斯くて文永の春のことゝかよ、觀音の尊像を仰ぎ見たまひて、此菩薩は何程の功德ありて、斯く諸人の恭敬をうけたまふや、且つ菩薩も亦た人なるかとの疑を起したまひ、忽ち出家求法の志しを萌したまひり、八歲の春に至りて父母に請ふて永平寺に登らせられ、徹通義价禪師の御弟子とならせられ、十年がはゞ其秋えをうけさせ、弘安八年の正月に暇を乞ひて初めて行脚に出たまひ、先づ大宋より來られしとて、大善知識の聞え高き、越前大野の寶慶寺寂圓和尚に參じたまひ、それより京都萬壽寺の寶覺禪師白雲の慧曉和尚に見えたまひ、尋で叡山へ登り天台の法門を學びたまひけり、弘安九年の七月山を下りて紀州由良の興國法燈國師を訪ひまゐらせて、禪門の奥義を叩き、翌年又諸方を遊歷せられて、有ゆる知識を尋ねた

まふに、到る處感賞を蒙りて、悟道の許可は受けたまへども、未だ自から安んじたまはず、遂に正應元年に永平寺に歸らせられ、徹通禪師に隨ひまゐらせ、翌年禪師と共に富樫左衛門尉藤原家尙の請に應して、加賀の大乘寺にれもゐたまひしが此年たま〳〵法華經をよみたまひて父母所生眼悉見三千界と云る文に至り、大に悟りたまふ所ありしかば、直に禪師に其由を申しあげ、更に工夫を凝らしたまひ、一切經をも讀み了らせけり、是年徹通禪師の上堂とて、眷さ法式を行はせたまひ、平常心是道といへることを說きたまふに、豁然として無上道を大悟したまひしかば、翌年正月十四日に入室せしめ、永平寺高祖より孤雲禪師、孤雲禪師より徹通禪師、と三代相承したまへる袈裟を授かり、日本曹洞第四祖の位をゞ繼がせける、此頃細川刑部太輔賴春の屬將とて、加賀國富樫家の緣族なる、阿波國海部の郡司某氏といふものあり、滿城寺といふ寺を建て國師を請したるが、正安元年に徹通禪師より御使の來りければ、直ちに大乘寺に歸りたまひ、徹通禪師もおひ〳〵老衰せられれば、禪師に代りて說法をしたまふ暇に、傳光錄といふ御書物をあらはしたまひ、乾

元元年禪師大乘寺を國師に讓りたまひ、延慶二年の九月十四日に九十一歲にて遷化したまひければ、御葬儀其他の御追孝も大方ならず、翌年九日の御一周忌御法會に上堂したまひし時は、天上をも感動せしめしたまひしにや、天華ふりて本堂のはたりに散り亂れ、參詣の道俗手に掬るほどのありさまなりしかば、人間の感歎は限りもわらざる事どもなり、是より他宗より改宗して歸依するもの多きは、此頃の事なるべし能登國鳳至郡櫛比の庄に諸嶽寺と名る眞言の律院あり、行基菩薩の開基として觀世音菩薩を本尊とし、諸人の信仰多かりしが、元享元年の四月十八日　諸嶽寺の主なる定賢律師觀音の御告げにて、不思議の靈夢を感せし事ありとて、其寺を國師に讓りたてまつりしかは、是年六月八日、眞言律院を改めて、曹洞宗の道場とし、開堂の法式を行ひ諸嶽山總持寺と名けたまひける、斯く道德の聞え四方に高かりければ、後醍醐天皇の勅詔にて、孤峯覺明和尙を勅使に立られ十ケ條の御疑ひを問はせたまひけり、國師は一々これにお答へを付けたまひ、頓て奏上したまひしに殊の外叡慮にかなひ御感斜めならず、再び能登へ勅使と降し紫衣を賜ひ、勅額を賜

はりて總持寺を官寺に加へたまひけり、正中元年八月七日峨山紹碩禪師に總持寺の席をつがしめて、退院上堂の式を行ひ、同二年春の頃より、聊か病ひの兆しありて七月俄かに處々の御弟子達を集めたまひて、八月八日に永平高祖御臨終の儀式の如く八大人覺を說かせられ十四日には御本師なる徹通禪師を御供養あり、十五日の羅漢講式をも勤めたまひ、夜半になりて俄かに鐘を鳴らし、大衆を方丈へ集めたまひ暫らく御說法ありて、頓て自耕自種開田地、幾度賣來買去新、無限靈苗繁茂處、法堂上見二挿鍬人一と、偈を書きたまひて扨のたまひけるは、我れ化緣已に盡き、泥洹時至れり、釋迦牟尼世尊は二月十五日の夜半に入滅したまひ、我れは八月十五日の夜半に衆を辞す、同中に異あり、異中に同ありなどのたまひつゝ、坐禪の床に坐したまひしまゝ、奄然として息たへたまひしかば、大衆の悲嘆限りなく、中にも明峯禪師の如きは、氣絕したまひて暫らくは人事を弁まへたまはざりしといふ、安永元年十一月二十九日、後桃園天皇の震翰にて、弘德圓明國師の號を追證したまひ、又明治十年には兩山の大禪師協議と遂げられ、太祖國師と稱したてまつるべき旨定めさせられ、兩山まず〳〵親睦して、兩祖の德光を輝かすべきやう御心配になりました、アゝかく高祖太祖の御恩澤に依りて、今即心是佛を証得したは、何たる仕合な身であらふぞ、返すがへすも報謝を心ろ懇るが何よりも大切であります、

大賣捌所

東京市京橋區三十間堀二丁目　明教社
東京市京橋區加賀町十四番地　國母社
東京市芝公園第八號地二番　如是社
東京市京橋區新肴町十三番地　新豐書院
東京市芝區露月町十八番地　鴻盟社
東京市麻布區飯倉町五丁目　森江佐七
京都市三條通高倉東入　出雲寺文次郎
京都市寺町通二條下る　河合文港堂
名古屋市門前町　三浦兼助
石川縣金澤市上近江町　近田太平

明治二十九年六月廿六日印刷
明治二十九年六月廿九日發行

（定價金五拾錢）

東京市芝區芝公園第八號地二番
著作者　今川勇禰

東京市麻布區宮村町七十八番地
發行者　池田良吉

東京市京橋區中橋和泉町活版所
印刷者　北澤久太郎

東京市麻布區宮村町七十八番地
發行所　踐法書院